

一筋の煙

藤田和清

一、プロローグ

孫の希望で夏休みを利用して、六甲山々頂からの神戸の夜景を見学に出掛けた。ベストポジションには既に大勢の人達が陣取っていたので、我々は更に五〇米ほどの高見に場所を求めた。

眼下に広がる一望の夜景を眺め続けている孫は

「宝石を散りばめたよう。夢みたい」

と少々大人びた話し振りの後、感傷的に物思いに耽るなど、既に年頃の乙女のようにも感じ取れ、同居の祖父である私からも段々と離れつつあることを悟った。孫の成長は喜ばしくもあり、また事実嬉しくもあったが、同時にどうすることも出来ない一抹の寂しさを味わうのであった。

その孫の後姿を見ていて、私は心の隅に何か引つ掛る物があることを感じ、それが何であるのか思い出そうとしても思いつかず、そのもどかしさに少々苛立つ

ていたが、そのもやもやに迫りつくのにそう時間はかゝらなかつた。私の頭の中で物語が転がり始めたのは暫くしてからであった。像が次第に明確になってくるのにシンクロして私は胸が熱くなってくるのを覚えた。それは現在の私の孫と同年齢（十歳小学五年生）の時に阪神淡路大震災で亡くなった少女のことである。

二、出合い

定年退職を一年後に控えた私は、自分の目的で四国歩き遍路の旅に出ている。一四〇〇kmを既に歩き終え、お礼参りのため一番札所の霊山寺へ向かつていた。その途中、遍路達で賑わう二番札所の極楽寺山門前を通りかゝった時、出立の折

「頑張りなさいよ。結願したら必ず寄るんですよ」

と遍路の私に温かい声を掛け励まして下さった年配の寺世話さんの事を思い出

した。結願の報告と、この感動をお伝えしたく極楽寺山をくぐった。

「ただいま!」

と四〇日振りに自宅に帰ったような懐かしさと安堵感を覚えた。目的を達成した今、その充実感で心にも余裕があり、超極上の幸せ感を感じていた。寺世話さんへの報告を感動の涙で終え、又寺世話さんからも、

「良かった、良かった」

と涙目での労いのお言葉を頂いた私は、暫くその余韻を味わいたく境内の樹齢千年以上と言われている長命杉の下のベンチにどつかと腰を休ませた。四〇日に及ぶ長旅であったため白衣や頭陀袋は薄汚れ、菅笠は破れ、磨り減った金剛杖を傍らに、一見乞食同然の姿ではあったが心は満ちたり、その表情は温和で満足感に溢れていたと思う。

暫くして私の休んでいる同じベンチに一組のご夫婦が腰掛けられた。会話の柔かいイントネーションから関西からの四〇歳代のご夫婦だと直ぐに判断出来た。人の良さそうな方達であることも感じられた。見知らぬ者同士何も話すことも無

く、目に見えない軽いバリアを感じていた。聞き耳を立てていた訳ではないが、お二人の話は直ぐ横の私には手に取るように聞こえていた。話は、人間ではどうする事も出来ない神か仏の領域の内容であつたように記憶しているが明確には分からなかつた。言葉の明るさから希望も感じられた。

五分ほどして奥さんの方から私に話し掛けてこられた。

「あのう失礼ですが、今着られている白衣が随分汚れています、もう遍路を終えられたのですか？」

「はい、自分の脚だけでの巡礼だったので、やつと終りました。身体はもうぼろぼろに疲れ切っています。でも気持は最高に充実しています」

「そうなんですか。それはそれはおめでとうございます。お疲れ様でした。それでお聞きしたいのですが、発心の理由は何だったのですか？ もしお宜しければ是非お話し願えませんか」

「単純なんですよ。供養ごとくか、何か心に悩みを持つての遍路ではなかつたのです。定年退職後の第二の人生に備えて

自分の体力、気力が今どれくらい残っているのかを知りたかつたのです。一言で言えば自分試しの遍路だったので。本当の遍路さんと較べて軽い軽い発心の理由で、大変申し訳なく思っています」

「いえいえ決して軽々しい理由ではないと思います。ところで遍路を終えると本当に心は癒されるのでしょうか？是非お話し願えませんか」

「今、心は正直言つて大変充実していますよ。でも遍路立立の前にはものすごく不安があり、こんな大それたことを思い立たなければよかつたと正直思いました。でも歩いているうちに次第に不安も取れ、段々と大胆になつてきて歩き続けている自分がありました。心身ともに疲れ果て何度も途中で止めようと思つた事もありましたが、地元の人達の温かい心と励ましのお蔭で最後まで頑張る事が出来ました。それと、具体的な事ではないので話に出来にくい事なのですが、敢て付け加えると、遍路を続けていて挫折そうになつた時、何か不思議な力を感じ歩き続けなかつたという気持ちにさせられたのです。それが何であつたのか今も分かりません。

結願した今、第二の人生にとつて大いに自信がつかました」

「あらためておめでとうございます。ところで私達夫婦も諦めずに遍路を続けていれば、あなたの今のような心境になれるのでしょうか？」

「もちろんです。絶対になれると思いません。私の場合最初からそのような事は期待せず、いい頃加減な気持で歩いていましたが、段々と変わってくるものなんです」

三、阪神淡路大震災

奥様からの質問には、かなり答えていたが、私からも質問してみたくなつた。

「ところで、ご夫婦はどんな理由で遍路を始められたのですか？ 差し障りの無い範囲で結構ですからお話し願えませんか」

すると奥様は、バッグから、丁寧にしまつてあつた封筒を出され、その封筒より一枚の写真を取り出され、

「どうぞ見て下さい」

と私に渡された。その写真には小学生と思しき、可愛くて利発そうな少女の半身像が写っていた。その時点で私は大凡の察しがつき熱いものが溢れそうになつたが、ぐっと堪えて奥様からの説明を待った。

「この子は当時十歳で小学五年生だったので、五年前の震災で亡くしてしまいました」

「えっ!!お辛ければこのお話しは、止めてもらって結構ですよ」

「と言いつつも、私の方が涙を滲ませていた。」

「いえ大丈夫です。遍路を終えられた方はお大師様の身代わりだと聞いております。貴方様こそご迷惑でなければ、是非私達の話しを聞いて下さい。聞いて頂くことで私達も少しは楽になると思っていますから」

傍らのご主人も、私の顔を見て小さく頷きながら懇願されるような目で、

「よろしく願います。聞いて頂くことにより私達も少しは楽になると思いますが」

と奥様と同じ言葉を繰り返された。奥様は、フーと大きく息をされ、意を決められたように子細を話し始められた。

「私達は大震災の被害者なんです」

阪神淡路大震災

1995/1/17 05:45M7.2

「前日、いや地震の起こる寸前までは親

子三人貧しいながらも平和な暮らしをしていました。私は朝餉の仕度をしていたのですが、主人や子供はまだ布団の中でした。地震は突然にやってきました。今まで経験したこともなく、天地をひっくり返すような激しい揺れに立ち上がることは疎か、外へ逃げ出すことも出来ず、住んでいた古い木造家屋は、あつと言間に全倒壊してしまいました。一階の主人と私は何とか倒壊した柱や壁や屋根の隙間から這い出してきましたが、二階で寝ていた子供の姿が見えませんでした。倒れた二階の窓から外へ出たのだろうと思ひ、私達も這々の体で外へ脱出しました。私は何かにひどく打ち付けられました。私は腫れ上がり、普通に歩ける状態ではなくなっていました。腕はガラスの破片で切つたらしく、ひどく出血していました。が興奮していたせいか痛みは感じませんでした。主人は私よりもひどく、殆ど立ち上がれない状態でした。外に出て直ぐ辺りを見回したのですが、子供の姿は何処にも見当たらず、私は呆然としました。痛みを堪え、子供が居たであろう二階の子供部屋付近の瓦礫を取り除いて何

とか子供を見つけ出そうとしたのですが、大怪我を負っている二人にはどうすることも出来ませんでした。廻りに目を凝らして見渡すと、まだ明けやらぬ薄暗い闇の中には、町中の倒壊した木造家屋の残骸が互いに折り重なって、人力ではどうすることも出来ないであろうことを感じさせていました。倒れないで辛うじて建っている建物は、鉄骨造りかコンクリート建ての小さなビルぐらいでした。人手を借りるにも廻りが同じような状態なのでとても期待出来ませんでした」

「諦められず、再び必死で子供を助け出そうと、大声で子供の名前を叫びながら瓦礫の山をどけ始めたのですが、傷を負った二人には所詮無理でした。時間がどんどん過ぎていきました。どれくらい経つた頃でしょうか、空は明るみ始め辺りも騒々しくなってきました。でも、依然として他の誰かに助けを期待するのは無理な状況だと思われました。騒々しい周囲が静かになったほんの一瞬、私は助けを求める微かな子供の声を聞き逃しませんでした」

「かあちゃんー痛いよー助けてー」

「私は、自分の空耳かと思ひ、主人に私と同じ場所でその声が聞こえるかどうか確認してみることを頼みました」

「主人も、弱々しいが微かなその声をはつきりと聞き取つたらしく、私の顔を見て少し頷きました」

「まことに弱々しく、かほそい声でした。二人は助けを求める我子の声をはつきりと聞き取りました。子供の力ではどうする事も出来ない何か大きな物に挟まれているようです」

「無理だと分かつていても私達はじつとしていることは出来ず、死に物狂いで助け出そうと懸命に努力したのですが、所詮大怪我を負つている二人には、焼け石に水でした」

「○○子ちゃん今直ぐ助け出してあげるから我慢するんですよ!!」

「大声で何度も何度も力強く励まし続けるのが精一杯で、私達の懸命の声掛けにも子供からの反応は段々と小さく、か弱い声に変わっていききました」

「廻りの木造家屋の殆どは倒壊して、街の見通しが良くなり遠くまで見渡せました。朝餉の途中だった家々では、倒壊し

た家屋の木材に火が燃え移り、真つ黒い煙が上がるのが遠くの方に見え始めました。私ははつとして、我が家の台所のあつた付近を見ました。幸ひ火の手は出ておらずはつとしました」

消防車は沢山出動していたが、増えきた火災現場の全てには対応しきれず、しかも地下水の容量不足から、出さなければならぬ水は出せなかつた。倒壊家屋の下敷きの人数多：増え続ける火災現場：水の出せない消防車：などなど悪いパターンとなり、最も恐るべき状況へと徐々に、そして確実に進行しつた。消防隊員はもちろん、うろたえている被災住民達もその事を鋭く感じ、恐れ戦いているだけであつた。

火災は海風に煽られ、ご夫婦の倒壊家屋へも、ゆつくりと確実に迫りつた。私達一人も何とかなければならぬと、強い思いを持ち続けましたが、夫婦二人だけではどうする事も出来ず、何かわけの分からない言葉を叫びながら只うろろうするばかりで、気が狂つてしまひそうでした」

その時遠くより消防隊員二、三人が息

を切らせながら小走りで、ご夫婦の近くを通り過ぎようとした。

「子供が!!子供が下敷きになっているんです。助けて下さい、お願いします!!お願いします!!お願いします!!」

必死の形相の母親に腕を掴まれながら懇願された屈強な消防隊員達は、必死になつて何度も方法を変えながら救出を試みたが、所詮人力ではどうする事も出来なかつた。

「もう直ぐ重機が来ますから、それ迄何とか持ち堪えて下さい」

と縄り付いて放してくれそうにない奥様を優しく振り払い次の現場へと小走り去つて行つた。

迫りつた火の手は、二〇米、否一〇米ほどの所まで近付いていた。黒煙に混じり時折どす黒いオレンジ色の炎が吹き上がり、手脚に、顔に、身体全体に激しい熱風が襲つてきた。奥様はたまらず、たまらず、その場を離れ、ご主人の元へ戻り、呆然と立ち尽し、燃え盛る火の手を眺め続けているご主人に縄り付くのがやつとであつた。何も出来ないもどかしさの中、泣きじやくりながら二人で

有りつたけの声を合わせ子供の名前を叫び続けた。

「○○子ちゃーん!!○○子ちゃーん!!○○子ちゃーん!!……」

最後は声に涙が混り言葉にはなつていなかった。

そして遂に、子供さんが助けを求めている瓦礫の直前に火の手は迫った。乾燥しきつた瓦礫が燃え出すのに時間を要しなかった。海風に煽られて勢いを増した火の手は、燃える面積を確実に広げていった。そして怒り狂った魔物は遂に……。「かあちゃーん 熱いよー熱いよー助けてー」

振り絞った鋭い大声は、子供なりの断末摩の様を呈していた。

ご夫婦にとって、せめてもの、せめてもの救いは子供さんのものがき苦しむ姿が、見えていかなかったことであろう。絵図で見る地獄の中にいたご夫婦は、その状況下で心身を無茶苦茶に翻弄されていた。笑ってこちらを見ている閻魔大王に向い「地獄へは、極悪なことをした人だけが行くんじゃないのか!!この子はそんな事は何もしていないぞ!!」

ご主人は必死に大声で叫び続けていたが、閻魔大王は何の沙汰も下さなかった。

燃え盛る瓦礫下からの母を呼び、助けを求める声も段々と弱くなつていき、二分後には全くしなくなつた。炎だけが勢いよく轟音を立てて燃え続けていた。

「私は、それが子供の命の絶えた時だと咄嗟に思いました。瞬間心の中が真っ白になり、人間としての思考力は何処かへ飛んでいました。一人の母親、そして一人の人間を完全に逸脱していたのだと思います。人間の、そして母親の格好をした只の置物だったので」

「主人は私の肩を強く抱き、燃え盛る瓦礫をじっと見つめたまゝでした」

人間でない、母親でないことが瞬間途切れ、奥様は只の置物から人間として一人の母親に戻った。

「子供を助けられなかったのは私の責任で、一緒に死んで天国でその事を詫びよう」と尋常では考えられない衝動に襲われ、ご主人を振り払い火の中に飛び込んでいこうとした。

「主人は私の腕をぐいと掴み、絶対に放してくれませんでした。発狂しそうで何

を仕出かすか分からない私を、何時までも力強く引き止めてくれていました」

どうする事も出来ない二人は、抱き合つたまゝ激しく燃え上がる炎をただ見つめているだけでした。

倒壊家屋の瓦礫は、港からの海風を受け恐ろしげに轟々と音を立て燃え続けていた。そんな状況のなか時間だけは恐ろしく正確に、そして確実に時を刻んでいた。

どれくらい時が経つたであろうか、あれほど大きく、激しかった火勢は、少しずつではあるが弱まりつゝあるように思えた。

その後、時間の経過とともに、見渡せていた倒壊家屋の殆どは、全て燃え尽きたらしく、それらの場所には真つ黒な残骸が累々と続き辺り一面には、信じられない様な静けさが戻っていた。火災の時のけたたましい騒々しさや熱気も殆ど収まり、焼け焦げた強い臭いが辺り一面に立ち込めていた。

その時、黒焦げの瓦礫のほんの僅かな隙間から、真つ白で細い細い一筋の煙が夜明けの空に向つて真つ直ぐに高く高く立ち上つていった。ご夫婦は並んで立ち、

その煙に向かい、深く深く頭を垂れ、煙が見えなくなるまで手を合わせ続けるのであった。

四、エピソード

大震災からやがて五年が経とうとしていた。街は新しい都市計画にそつてゆつくりと、そして確実に復興に向けて突き進んでいた。

横倒しとなった高速道路は新しい工法の基に生まれ変わり、ビルも少しずつ建ち始め、神戸のシンボルでもある港も岩壁の嵩上げ工事が急ピッチで進められていた。

一番大切な一般住宅の復興は、先ず道幅を広くした土地に、新しい建築基準に則つて少しずつではあるが建ち始めた。

神戸市を含めた兵庫県全体の死者数は約六五〇〇人、その中の一人である娘さんの死も冷静に現実として受け止められるようになっていた。夫婦は、娘さんの供養を主に四国遍路の行脚旅を思い立った。

この五年間は、精神的にも身体的にも苦しいことの連続であったことを夫婦二人で振り返った。いっそ親子三人で仲良く天国で暮らそうと思つたこともあつた

が、思い止まりよくどこまで頑張り通せたものだと、お互い手を取り合い、にっこりと微笑む二人であつた。そのお互いの手の温もりから、これからも強く生き抜いていくためのエネルギーをお互いに感じ取つていた。ご夫婦の目からは、限りなく透き通つた一筋の涙が零れ落ちていた。子供の霊を供養しつつ、自分達も完全な立ち直りの切っ掛けにしようとする遍路行脚であり、目的に向つて進むご夫婦の表情にも元の明るさが戻りつつあつた。阿波の国第一番札所霊山寺では、御老僧に取り次いで頂き、震災で子供を亡くした時の様子とか、二人の精神的心の揺らぎ、そして遍路に至るまでの経緯を詳しく聞いて頂き娘さんの霊を手厚く弔つた。

御老僧からも、この五年間の苦勞と、それに堪え抜いた二人に対し、心からの労いのお言葉も頂いた。

「心の執着を捨てると、そこには自由な世界がある。身も心も捨てて天に任せる充実感といったものです。ですから嬉しい時は思い切り喜んだらいいし、悲しい時は思い切り泣けばよい。その事実を受

け入れば必ず流れていくものです。大切な事はその事に執着しないことです」
二番札所極楽寺での納経を済ませたご夫婦は、先ずは一服と境内の長命杉下のベンチに腰を休めた。そのベンチには、うす汚れた白衣、磨り減つた金剛杖、破れた菅笠で一見乞食同然の一人の老遍路が既に休んでいた。

おわり